

令和7年2月19日 プレコンセプションケアの提供のあり方に関する検討会（第3回）

これまでの検討会における主なご意見

こども家庭庁成育局母子保健課

検討会の議論のまとめ（１）

◆性や健康に関する正しい知識の普及について

- プレコンセプションケアは、いつ、誰にどのような形で情報を伝えていくかが大変重要なポイント。
- プレコンセプションケアについて知った知識は、将来に向けてもそうだし、今も重要なのだろうと感じている。
- プレコンセプションケアを周知するために人材教育も必要。
- 妊活前の段階から生活習慣や感染症、高齢出産など母子に与えるリスクについて、自然に情報が入ってくる仕組みが非常に重要。
- 妊活や妊娠といった個別テーマよりも根底のレベルで、こどもやパートナーの健康自体に対する理解や責任感が醸成できればよい。
- 情報洪水と呼ばれる状況で正しい情報を見極めることに苦勞する。
- 生活リズムを整える、栄養バランスに気をつけるなどの一般論よりも、具体的なレベルに踏み込んだ参考指針や事例を示してほしい。
- 内発的な気持ちがないと、人はどんなよい情報を大量にもらっても何の意味もないというのは、学校教育が証明している。それで大人になっているという現状から、タイミングということと意欲、内発的に本当に自分が関心を持って情報を入手することが大事。
- 少子化、未婚化みたいな話がテーマになるが、大人がそれを強引にさせたいと思うだけでかなり引いてしまう。いかに押しつけにならずに「当事者意識」を持たせながらやっていくかということがポイント。
- 言葉の中には「産めよ増やせよ」という特定の価値観の押しつけに感じる方もいるのではないかなと思うが、こどもを持たない選択をすることも選択肢の一つ。個々が権利の主体として科学的知識に基づき、他人の生き方を尊重して自分のウェルビーイングを実現できることをメッセージとして打ち出して推進すべき。
- 知識だけでは足りないということ。そのことを知ったことで自分の態度を変えていたり、スキルとして身につけることが大事。
- 立場の優位性を利用した性被害が後を絶たない中で、こどもと一緒に大人も学ぶようなものができる必要がある。
- ワンパッケージで提供する必要はなく、例えば、メンタルヘルスの枠組みに載せていくとか、生活習慣病対策の中に入れていくとか、様々なシステムに載せて、保健医療システム全体で担うとよい。
- プレコンセプションケアは「妊娠」にとどまらず、若者の健康づくりというイメージを国民に発信することが重要と考えるが、全国に広めていく上では、ばらばらな状態で、様々な組織に、自治体に、学会に、国民の方に伝えるとき、非常に誤解されやすいので、そこもきちんと発信できるようなことが必要。

検討会の議論のまとめ（２）

◆性や健康に関する正しい知識の普及について（続き）

- 男性と女性で意識の差があるかなというのを周りと話して感じた。男性のほうが妊娠に関して意識が低いことが多いと思うので、男女問わず関心を高めるであったり、身近に感じるような施策も必要なのかなと考える。
- 対象が男性・女性共にという入り口を分かりやすくして、男性、そして、最終的には性と健康といって、妊娠だけではなくて、広い意味では生涯を通じたというところを前面に出していくと、非常に新しい取組で全ての国民が自分事として捉えられるのではないかな。
- 生涯を通じ男女でかかりやすい病気等が違うので、男女のかかりやすい病気の違いという内科的な視点がもう少し入るとよい。
- 包括的性教育は、自分と他者を大切にすると人権的アプローチに基づく性教育になるので、これを抜かしては土台が崩れてしまう。
- 学校内外でのこどもへの教育、社会での情報提供、また、そこに繋ぐ保健医療関係者の会話も重要。社会システム全体で実施していく必要。
- 「包括的性教育とSRHRを基本にしたプレコンセプションケア」及び「女性のライフサイクル全体を視野にいたしたプレコンセプションケア」、この2つを重要なポイントと考えている。
- 指導要領の中で歯止め規定があったり、性教育で生物学的なメカニズムについてお話しはしていても、人権的アプローチで段階的に学んでいくという性教育の仕組みには、基本的にはなっていないと思う。
- 学童と性成熟期を対象とするならば、その取っかかりで学童は非常に大きく、学校現場の教育とあまりにも解離があると一向に進まない。
- がん教育というのが国としての取組で、がんに対する知識をこどもに伝えて、そこからさらに家族へのがんの早期発見や予防に対する意識を高めるという活動が行われている。プレコンセプションケアもがん教育と同様に中学生ぐらいの男女に伝えていくのがよいと思う。
- 学校教育では、幼稚園から高等学校段階まで性教育を行っている。「生命尊重」「生物学的側面」「心理的側面」「社会的側面」の4項目の内容を学んでいる。系統立ててカリキュラムマネジメントという形で、教科横断的な性に関する教育が実際に行われている。
- 学校教育というのは、こどもが好む・好まないは別として、正しい知識を教授している。
- 学校では保健教育の質を向上させることが肝要かなと思う。サブカルチャー的なところも活用できると学習効果も上がるのではないかな。ドラマとかアニメーションの主人公が「朝御飯食べないと健康な体になれないよ」とちょっと言うだけで、こどもの頭にはすごく響くと思う。
- 企業研修の中に組み込んでいくよりは、年1回の健康診断でプレコンセプションに関する情報提供をできるとよい。

検討会の議論のまとめ（３）

◆プレコセプションケアに関する相談支援について

- 対象者にその存在を知ってもらう、必要性を理解してもらうことから、専門職間での役割分担、それに係る財源確保、そして、人材育成がケアを継続するために必要な要素。
- 相談者は一定量の知識を持って来訪することから、対応者の質担保、そして、24時間相談ができるような仕組みづくりも課題となる。
- 相談内容が多岐にわたるため、幅広い知識、最新の医療情報をキャッチするため、ケアを提供するための研修が必要。
- 男女問わず、性に関する情報に翻弄され、学校・家庭での性に関する教育が不十分な状況から、正しい知識を伝える場を増やすことが必要。
- 電話やメール相談後、必要な受診行動に繋がっているか不明であり、DVや自殺企図など、相談内容により関係機関との連携が必要。
- 望まない妊娠は防げないというのが前提であるのが一般常識かと思う。防ぐことを目的とした対応も大事だが、望まない妊娠が起きたときに対応する手段というのは、広い意味でプレコンセプションに入ると思う。
- ケアを必要としている方が心理的なハードルを下げ、相談しやすいような環境が必要。
- 対応時間、対応方法というところで縛りがあることから、夜間でもメール相談ができる体制が、アプローチを少しでも広げるのではないか。
- こどもたちだけでなく、親御さんにも話す機会があることで、悩みのハードルがある方に少しずつ「相談できるんだよ」ということが広められるという声もあった。
- 不妊症であったり、性や妊娠に関しての不安、悩みがあったときに、婦人科や泌尿器科といった専門家への受診が重要だが、心理的なハードルがあるのではないかと考える。その辺りのハードルを下げるということも、視点としては重要。
- 生理の周期が乱れたりしたときに、ウェブで検索して調べることはあるが、産婦人科には行ったことがないというような状況。周りでも、行く人は行っているが、行かない人は全然行かないというような状況で、そこでも意識の差みたいなのがあるのかなと感じる。
- 「30 歳を過ぎてこどもが欲しいときに、すぐにできる数値と自信を持って言えない。20 代のうちから妊娠するということを考えておくに越したことはないよ」と医師に言われ、自分も早いほうがいいと思うようになった。年齢に限りがあることを20代前半で知ることができ、自分のキャリアを組み立てられすごくよかったと思う。

検討会の議論のまとめ（４）

◆その他

- 「プレコンセプションケアという言葉を知っていますか」という問いに対して、「9割ぐらい知らなかった」という結果になっている。
- プレコンセプションは、確かになかなか浸透しにくい概念だなと思う。
- プレコンセプションケアという名前が、中学校ぐらいの世代からしっかり浸透していかないといけないと思う。
- プレコンセプションケアという言葉を知り、知識を身につけるのは、将来にも、今にも重要なのだと感じている。
- 現在の状態では、まずはプレコンを知ってもらうことで徐々にプレコンの意識を高める。そして、社会全体にプレコンを根づかせる。最後には、プレコンが当たり前の世の中にするのがよい。
- 各自治体のプレコンセプションケアはすばらしいものがたくさんあると思うので、それを日本全国1冊の本にまとめて、そこに専門家のコメントを付けて各自治体に配るとよい。